

## 戦争児童文学のアクチュアリティー

——今西祐行「ヒロシマの歌」論——

木 村 功

一九五八年五月五日、広島記念公園の一角で一つの銅像の除幕式が行われた。一九五五年に白血病のため一二歳でなくなった佐々木禎子を追悼するための「原爆の子の像」である。この銅像は、年若くして原爆による放射線障害によって命を奪われた佐々木禎子一人の死を記念するモニュメントというばかりでなく、原爆によって強奪された「子ども」たちへの慰霊を、佐々木禎子という一人の少女に代表させたものでもあった。今西祐行（一九三三〜）が「原子雲のイニシアル」（『朝日新聞ジュニア版』一九五八年八月七日）を發表したのは、それから三ヵ月後のことである。

二年後の一九六〇年、国分一太郎の編んだ『日本クオレ②へ愛と真心の物語』（一九六〇年二月一〇日、小峰書店）に今西の「ヒロシマのうた」が採録され、「ヒロシマの歌」は現在の姿をほぼ現すことになる。そこでは、原爆によって廃墟と化した広島で救助さ

れた赤ん坊が、一五年後の成長した姿を読者の前に現している。佐々木禎子という固有名を持つ存在から、原爆の悲劇を物語る「原爆の子」としてシンボライズされた少女と、ヒロシマを舞台にした児童文学に描かれた少女ヒロ子は、悲劇とハッピーエンドの違いはあるが、ヒロシマの「復興」を象徴する一つの好例であるといえよう。

今西祐行やおおえひで（『南の風の物語』理論社、一九六一）によつて児童文学に原爆が取り上げられたが、さらに原爆児童文学としての意識が先鋭化されたのは、大野允子ら「子どもの家」童話研究会のメンバーによる作品集『つるのとぶ日』（東都書房、一九六三年）や、大野の『海に立つにじ』（講談社、一九六五年）の刊行による<sup>①</sup>。原爆投下後ここにいたるまで、実に二〇年の時間が経過しているのだが、原爆を文学作品の題材として設定すること自体は、大田洋子（『屍の街』一九四八年）や原民喜（『夏の花』一九四九

年)によって早くから試みられていた。しかしそれらの営為の一方には「原爆タブー」と呼ばれる占領軍を意識した作家・出版社の自規制が行われており、それは一九五一年九月のサンフランシスコ講和条約締結まで続いたのである。長田新編『原爆の子』(岩波書店、一九五一年一〇月)によって、戦争・原爆被害者としての子ども視点から捉えられた原爆とその被害状況が証言されるのもやはり「原爆タブー」解禁後のことである。原爆をめぐる言論に抑圧がかけられた時期を経て、今西や「子どもの家」童話研究会の同人たちは、へ概していえば、その多くが被爆体験者、あるいは当時に広島・長崎周辺において、被爆後のさまを実際に目の当たりにした者としての、証言という形で描かれている<sup>③</sup>と指摘されるように、直接原爆を体験した者の立場から原爆児童文学の初期にあたる作品群を発表するようになった。そこには原爆の脅威を直接に知る当事者たちの意識に働きかけるような国際情勢における危機的状況の出現が認められ、それが原爆児童文学を生む契機となっていたのである。

本論では、戦後の厳しい国際情勢の中で生まれた「ヒロシマの歌」を対象に、その世界像と問題点を考察するとともに、戦争・原爆を扱う戦争児童文学の現在についても私見を述べてみたい。

## 一 「原爆」の再発見と「復興」

八月六日当日、当時二三歳の今西祐行は海軍陸戦隊第三三大隊に所属し、呉市郊外の川原石で上陸するアメリカ軍への迎撃を想定したゲリラ戦の演習に参加していた。いつもどおりの夜間演習を終えて朝食を採った後今西が草原でまどろんでいると、まぶたの裏に強い発光を感じ、山鳴りのような音を聞いた。

「おい、あれを見ろ。」

と、だれかが叫んだ。山の向こうに、むくむくとまぶたの裏に雲がもたもたあがっていくのである。

その日は雲一つないよいお天気だった。その青空が、いつしかまぶたの裏に雲がもたもたあがっていくのである。それは見たこともないふしぎな光景であった。(「敗戦まで」)

この後今西の部隊は、救援隊として原爆投下直後の広島へ向かい、そこで五日間(正味四日)滞在してへ負傷者の救護と死体の整理、広島駅の復旧作業、そして炊き出しをしてにぎりめしを配る(「敗戦まで」)任務に従事している。広島での今西の目撃体験の内実は、「八月十五日に想う」や「敗戦まで」というエッセイに詳しい。そ

の折に今西が目撃し体験した事柄が、一三年後に先ず「原子雲のイニシアル」として、それから二年後の「ヒロシマの歌」として結実することになるのである。ここで今西が原爆を児童文学の対象として措定するに到った時代背景を理解するために、戦後の日本が辿った「復興」の道程を確認しておく必要がある。

一九五二年のサンフランシスコ講和条約・日米安全保障条約締結によって、日本はアメリカの傘下に従属する形で再スタートをきることになる。戦後の米ソが対立する冷戦構造の中で一九五〇年に朝鮮戦争が起こり、日本はアメリカ指導の下逆コースと呼ばれる再軍備の流れに巻き込まれていった。一九五四年のビキニ水爆実験ともなう第五福龍丸の被災事件を契機に、第一回原水禁世界大会が一九五五年に広島で開催され、世界的な平和運動が立ち上げられる一方で、一九五八年には日米安全保障条約の改定問題が浮上し、それは岸政権によって一九六〇年に国民の合意を経ることなく一方的に締結されてしまう。国民の間では、このような「いつか来た道」を辿る政治動向への不安が強まり、それは安保反対闘争となつて表れることとなった。戦争児童文学の登場は、例えば関口安義が「彼（木村注―今西祐行のこと）のヒロシマものも、安保条約反対闘争という時代状況と深くかかわって存在する」<sup>④</sup>と指摘するように、冷戦構造の中での再軍備化・安保条約といった政治動向に児童文学に

携わる作家たちが危惧を抱いたことが一番の要因であり、「原爆」もその中で再発見されたわけである。また米ソ対立がもたらした一九六二年一〇月のキューバ危機が、核戦争に発展しかねない緊張を生み出して世界を震撼させたことも看過できない。

このような危機を内包した政治状況とは別に、一九五六年の「経済白書」が「もはや『戦後』ではない」と記したように、戦後の日本経済は神武景気（一九五六年）と岩戸景気（一九五九年）の下に順調な復興を遂げていた。しかし住田勝は広島の復興に関して、大田洋子「夕風の街と人」と（一九五五年）を参照しながら、「正統な」広島の生き残りたちを葦原の沼沢地（江波や吉島）に追いやって、平和観光都市「ヒロシマ」の建設に奔走した篡奪者たち」の存在を指摘し、へまさに、当の生き残りたちとは関係なく、「広島の復興」という名の篡奪が行われ、新たな「ヒロシマ」という反核・反戦・平和のシンボルとその物語がねつ造されていくプロセス<sup>⑤</sup>の登場を厳しく剔抉している。以下の一文は、そのようなヒロシマの順調な「復興」ぶりを表現したものととして読む必要がある。

そして日本の戦後復興と平行して、広島も進んで行った。例えば、「国際平和文化都市」広島、「世界のヒロシマ」のシンボルとしての原爆ドーム。その保存が市議会で決定された一九六六

年当時、根強い取り壊し意見を含め多様な声が市民各層に存在した記憶はすでに遠い。その翌年には原民喜の詩碑が原爆ドームそばに修復・建設され、平和公園の整備も進む。そしてそれらの動きと並行するように一九六八年には、近くを流れる元安川河川敷にあったバラック群、通称基町スラムの再開発協議会が設立され、一帯は一〇年かけて市内でも有名な近代的高層アパート群に変貌する。<sup>⑥</sup>

日米同盟下における日本の再軍備と、その一方での経済復興に裏打ちされた国際平和文化都市「ヒロシマ」の建設といういびつな構図が見出せる日本の戦後復興の中に、今西祐行の「ヒロシマの歌」という作品を位置づけた時、「ヒロシマの歌」の世界はどのような意味を開示するのであろうか。一九六五年当時の今西祐行は、彼が捉えた「ヒロシマ」としての原爆体験を文学に再現することが困難な作業であることを以下のように述べている。

私は二年間軍隊にいて最後に広島で原爆に遭遇した。そのことを「ヒロシマのうた」「あるはんの木の物語」（いずれも一九六一、二年「少年少女代表選集」収録）「原子雲はるかに」（全通新聞）の二つの短編と一つの長編に書いたが、「ヒロシマ」というもの

の何分の一も書けていないようだ。他の誰の原爆小説や童話を読んでも、まだ私はあきたりない。どうすればあの原爆というものを文学にとらえることができるのか、私のこれからの課題である。「わたしの児童文学」「週間読書人」第五九三号、一九六五年九月二七日）

「ヒロシマ」というものの何分の一も書けていない」と述べている今西は、少なくともヒロシマの「復興」を物語った「ヒロシマの歌」の世界の中には生きていない。このことは原爆体験を書いているうちに彼の中で見出された、ヒロシマと向き合う新たな自覚によるものであったと思われる。

## 二 「ヒロシマの歌」の世界

今西祐行によると、「ヒロシマの歌」の題名は、小峰書店編集部にいた砂田弘によって初出時につけられたものであるという（ただし、「歌」の表記は「うた」。「歌」というのは「訴う」から転化したことばだといえます。この作品にこめた私の想いをくみとって、いい題名をつけていただいたと今も感謝しています<sup>⑦</sup>）と今西は述べている。「歌」という言葉が、「訴う」意味から転化したものだとして、この作品から読者はどのような「訴え」を聞き取っているのか

あろうか。

関口安義は、〈原爆の悲惨さとヒューマニズムの立場からの戦争の悲劇の告発である〉と反戦的な立場からの読解を示しているが、これは「ヒロシマの歌」の構成が前半の原爆の被害状況の描写と、後半のヒロ子の成長とヒロシマの復興が描かれた二つの場面に大きく分けることが出来るからである。前半部で目撃された原爆の風景は、以下のようなものである。

町の空は、まだ燃えつづけるけむりで、ぼうつと赤くけむっていました。ちろちろと火の燃えている道を通り、広島駅の裏にある東練兵場へ行きました。

ああ、その時のおそろしかったこと。広い練兵場の全体が、黒くると、死人と、動けない人のうめき声で、うずまっていたのです。

やがて東の空がうすあかるくなって、夜が明けました。わたしたちは、地獄の真ん中に立っていました。本当に、足のふみ場もないほど人がいたのです。暗いうちは見えませんでした。それがみなお化け。目も耳もないのつべらぼう。ぼろぼろの兵隊服から、ばんばんにふくれた素足を出して死んでいる兵隊たち。ペロりと皮をはがれて、首だけ起こして、きよんとわたしたちをな

がめている軍馬。だれも話している者はありませんでした。ただ、うなっているか、わめいているばかりです。そして、まだまだ、町のほうから、ぞろりぞろりと、同じような人たちが、練兵場に流れてくるのです。

この酸鼻を極めた光景は、「あるハンノキの話」（一九六〇年三月二五日）でも語り手のハンノキによってほぼ同じ内容が物語られるし、「敗戦まで」（「わたしの8月15日」一九七五年六月三〇日、あかね書房）でも言及されており、いかに今西の脳裏に強く焼きつけられた光景であったかが伺える。そしてこの光景の中で、「わたし」（「稲毛」）が瀕死の母に抱かれた赤ん坊を見つけ、息を引き取った母親の手から赤ん坊を抱きとり、避難中の夫婦に預けるまでが「ヒロシマの歌」の前半部の物語である。今西自身の回想によれば、「死んだお母さんに抱かれていた赤ちゃんを抱きとって救護所に運んだことは事実です。ところが、翌朝救護所をのぞいたときには、赤ちゃんはもうそこいませんでした。それきりその赤ちゃんには私は会っていません」ということで、前半の語り手の記述内容は今西本人の体験に基づいているために迫真性を帯びて読者に感受される。

対する後半の「わたし」とヒロ子の再会の物語はフィクションと

いうことになるのだが、ただしヒロ子像は今西によれば親戚の子どもがモデルであり、その子はへそして原爆のもたらしたあらゆる苦しみのうち克って生きぬいていたのです。その子のことを思うにつけ、思い出されるのは、あるとき広島で見たたくさんの子どもたちです。あの赤ちゃんは今どこでどうしているだろうか。どうかこの子のように強く生きてほしいと祈らずにはおられませんでした。

そんな祈るような気持ちだが、このような物語になったのです<sup>⑩</sup>と創作のモチーフと併せて述べられている。このように「ヒロシマの歌」は、前半の今西自身の原爆体験と後半の赤ちゃんに対するへ強く生きてほしい」というへ祈るような気持ち)によって構成されている。そして、この後半部に重点を置いて読解する萬屋秀雄は、以下のように述べる。

戦後、ミ子はヒロ子となり、ヒロ子が中学を卒業した時、「わたし」は大きく成長したヒロ子に会い、明るい性格の女性に成長し新しく社会に巣立っていくヒロ子の行方に期待をかけるのである。

そこには、一貫して、一人の女の子、ミ子——ヒロ子への父性的な深い愛情が流れている。それは、なくなつたミ子の母親の愛情とひびき合いながら、今のヒロ子の母親の愛情を育て、その中

で明るく育つていくヒロ子への大きな期待へとつながっていく。それは単なる原爆の悲惨さ非情さの告発という原爆批判の次元を越え、一人の人間への関心に支えられてすぐれた文学作品として結晶しているといえるだろう。<sup>⑪</sup>

「大きく」「明るい」「新しく」という形容詞や「成長」「期待」という名詞で形象されたヒロ子像は、復興を遂げたヒロシマに生きる子どもに相應しい姿を示している。それは作品の中でも、戦後七年目の夏に広島を訪れたへわたし)がへ広島町の町はずっかり変わっていました」と、復興したヒロシマを紹介していることとも照応している(例えそれが原爆投下の日を「記念日」とみなすようなグロテスクな「復興」であつても)。そしてこの「復興」が、前章で述べた問題を内包していることはいうまでもない。へわたしは記念日を選んだことを、後悔してしました。記念のいろいろな行事は、何かわたしたちの思い出とかけはなれたものにしか思えなかつたからです」と、へわたし)自身も明らかな違和感を感じ取っている。しかし、その違和感はへわたし)の思い出との齟齬から感受される主観的な印象に留まり、へわたし)のヒロシマへの違和感はヒロシマが内部に抱え込んでいる問題へは届かないのである。

それだけではない。一九五九年にはじまる原爆犠牲者慰霊の灯籠

流しについて、〈ととうろう流しです。去年もやってみました。きれいですよ〉とヒロ子の言葉で言及されるが、それは原爆犠牲者への慰霊が遺児であるヒロ子によって一つの〈きれい〉な光景と紹介された時点で、原爆による死者と生き残った者との隔絶が、戦後世代のヒロ子の側から明確に刻まれたことを表している。作品の中では、再会の場所がヒロシマに設定してあるだけでなく、「今年の春」「今年の夏」と、戦後一五年が経過した一九六〇年現在の時点が意識的に強調されているが、それは単に原爆投下後一五年の歳月が経過したことを表しているだけでなく、「復興」によって原爆の死者が追悼行事の対象として回顧的に捉えなおされる段階へと進んだことも意味している。皮肉なことに「復興」したヒロシマ、国際平和文化都市ヒロシマの出現は、原爆が投下された広島を消去する一方で、「記念」・「追悼」行事というフィクショナルな装置を設けることで、原爆・死者・被爆者をその中に再定位するのである。それだからこそ「わたし」も、「復興」した現在の立場から過去を顧みることが可能になり、へもうすっかりむすめさんのように大きくなって〈いたヒロ子に対して目撃した実母の死の様相を「物語」ることも出来たのである。広島における〈わたし〉の酸鼻を極めた個別的经验は、「復興」したヒロシマの地に立つことによって、ミ子がヒロ子となるように成長・「復興」の「物語」へと変換されていった。

このように〈わたし〉が紡ぎ出す「ヒロシマの歌」の言説においては、後半部のヒロシマの「復興」が「物語」の内容を規定する枠組みとなっている。〈わたし〉は最初外部から広島を訪れて悲惨な原爆の光景を目撃し、戦後は原爆体験を忘れがちになりながらも、ヒロ子との再会のために再びヒロシマを訪れて、前半部とは異なる新しいヒロシマの姿を見聞きする。〈わたし〉は、最初から最後まで広島／ヒロシマとミ子／ヒロ子の変貌ぶりを報告する外部の視点に留まっているといえよう。ヒロ子との再会の後〈わたし〉が最後にヒロシマを去る場面で、ヒロ子からイニシャルと原爆のきのこ雲が刺繍されたシャツが手渡されるのだが、そこではヒロ子の成長ぶりと、ヒロ子が自分の原点（原爆と彼女を助けた〈わたし〉への感謝）を記憶して生きていくことが確認される。さらに〈ええ、おかげさまで、もう何もかも安心ですもの……〉というヒロ子の母親の声が重なって、〈わたし〉はヒロシマにおける物語を、成長と「復興」の「物語」としてハッピーエンドで締め括るのである。

しかしここには、「復興」後も生き続けている被爆者・遺族の存在がまったく捨象されている。たとえヒロシマの街が「復興」を遂げたとしても、被爆者・遺族の抱える問題は何も解決されないし、それどころか継続していく問題であることに気づくとき、「ヒロシマの歌」が、〈わたし〉の原爆体験を一つのハッピーエンドの物語

として読者に受容させてしまう危険性を内包していることが見えてくる。例えば読者たちは、前半の悲惨な光景を通して原爆という兵器の非人道性を理解した後で、ヒロ子／ヒロシマの成長・復興によってカタルシスを味わうことになるだろう。その結果ヒロシマは完結した「物語」として捉えられ、被爆者・遺族が抱え込んだ問題に想到する可能性は、読者が読了した時点で脳裡から消去されることになる。後年の隔絶の問題が生まれるのは、時間の問題であるといえよう。

そもそも語り手である「わたし」については、稲毛という名前と〈勤め人〉であること以外、どこに居住する人間なのか明記されない。「わたし」＝稲毛とは、名前だけの誰かなのであり、その意味で読者にとって他者であり続ける。ところが、読者が「ヒロシマの歌」を読むときに視線を重ねるのは、ヒロシマを外部から捉えるこの他者の視線なのであり、必然的に読者自身もヒロシマに対する他者として作品に向き合わざるを得ない。そして最後には、物語世界から「わたし」ともども離脱せざるを得なくなるのである。

今西自身へ私のいた救援部隊は正味四日間しか広島にいなかったのですが、その間に体験したことは今もつぎからつぎとリアルに思いうかびます。しかし私はまだそれを客観的に大きくつかみとることができないでいます。一生かかってもできないことかもしれませ

ん<sup>⑬</sup>と述懐するように、原爆の光景を体験した人間にも、ヒロシマを（そしてナガサキも）捉えきけることは困難な問題である。しかし、困難であることを考え続ける態度と、完結させてしまう態度は、少なくとも教育の場においては全く違う結果を導くだろう。同じ今西の作である「あるハンノキの話」では、ミーちゃんはヒロ子とならず被爆による白血病でなくなってしまう。ミーちゃんと仲良しだった「やおやの子」は、ミーちゃんの髪をかみきり虫で切って遊んだ思い出から、ハンノキの幹からかみきり虫を探し出してはへ見つけしだいに、力いっぱい土にたたきつけて殺していくのである。ここにミーちゃんを殺した原爆に対する幼い者の怒りが表現されていることは明らかである。原爆・ヒロシマ（そしてナガサキ）を考え続けるために必要なのは、この幼い者の怒りを受け止めることなのである。しかしそのような姿勢は、「復興」の世界観に貫かれた「ヒロシマの歌」には見出すことが出来ない。

「ヒロシマの歌」が、教科書に採録されたのは一九七七年版東京書籍の国語教科書『新編新しい国語』の六年次教材としてであった。同年度今西の「一つの花」も、教育出版と光村図書の四年次国語教科書に同時採録されている。ちなみに壺井栄の「石うすの歌」の採録も、一九七七年度版光村図書六年生教科書である。川口隆行は、<sup>⑭</sup>「興味深いのは、一九七四年に『夏の花』、次いで一九七六年に『黒



い雨」と、高等学校国語教科書に採録された時期がほぼ一致することだ。教科書という公的メディア、公教育制度への「原爆文学」の登録は、この時期にトラウマ記憶から物語記憶への変換、ある種の社会的合意形成が行われたことを示唆しよう<sup>⑭</sup>と示唆に豊む指摘をしているが、それは高校よりも採録が多い義務教育を視野にいれて考えられるべきであろうし、見てきたように「物語記憶への変換」の問題もすでに一九六〇年代には既に「ヒロシマのうた」として結実しているので、時期を早めて考える必要がある。「復興」は体験の場を上書きすると共に、体験を物語化しながら進行していたのである。

### 三 戦争児童文学のアクチュアリティー

見てきたように「ヒロシマの歌」を通じて表れてきた問題は、「復興」したヒロシマに基づく原爆体験の物語化とそれに付随する隔絶化の問題であった。

「ヒロシマの歌」は児童文学作品ではあるが、教科書に採録されていることもあって、教材として接する児童が多い。教室で読まれる場合の問題を住田勝は、「広島」という事態を、ある程度のリアルさで理解することができるためには、読者としての「素養」が、すでに必要となっているのではないかと「広島」を理解すること

が困難になった時代の到来を指摘し、「強烈で圧倒的な、一九四五年八月七日の、東練兵場の光景はしかし、子どもたちにとっては、単に忌避すべきグロテスクな描写でしかないかもしれない」と述べるのである。ここには戦後五九年を経て、体験ではなく物語化したヒロシマへの隔絶が覆い隠しようもなく顕在化して来ていることが危惧されている。似たような隔絶の事例としては、一九九〇年に沖縄で校外実習を行った東京の大学生が、沖縄戦の語り部たちに対して「不謹慎なことを言わせてもらえれば（語り部）は、酔っている」かもしれないと思った」と実習報告書に書き記し、語り部や関係者を怒らせたことを想起させる<sup>⑮</sup>。

このような戦争・原爆をめぐる言説への隔絶の問題は、戦争を題材とする戦争児童文学においても一九九〇年代前半より指摘される事態となっている。宮川健郎は、「戦争児童文学」は、かつての、児童文学の「理想主義」や「向日性」と同じように、現代児童文学に固有の考え方である。もう、「戦争児童文学」というわくぐみによって日本の現代史と現在とを考えることをやめてしまいたい<sup>⑯</sup>と、戦争児童文学が一つの物語生産のための鑄型に墮したことと、それによる先細り傾向と問題意識の形骸化を批判した。勿論ここで宮川が児童文学から戦争を切り離すよう勧めているのではないことは明らかである。

宮川が児童文学の分野で提起した戦争を物語ることの形骸化の問題は、戦争・原爆体験の継承のあり方の問題とも密接に関連している。戦後五九年目を迎えた今年、戦争体験者の高齢化は戦争体験の言語表現（体験談・文章）とその伝達をますます困難な状況に陥らせている。当事者ゆえの正当化・隠蔽、記憶の錯誤などの問題を回避することは困難ではあるが、その一方でその言語表現が当事者性に裏打ちされている「声」である点で、強固な一次的言説であることは言を俟たない。一方の戦争児童文学は、そのような「声」を伴う戦争体験者の言語表現に比べて、個性性を装いながら、それは戦争体験の個性ではなく、作者の想像力の個性性に還元されてしまいう点で、厳密には戦争・原爆体験そのものを表象するものではなく、前者の言説や戦争・原爆に関わるイデオロギーを模倣した二次的言説というべきである。したがってその言説は、主として児童文学とその出版市場を中心に流通するだけで、宮川の指摘する形骸化を免れることは難しい。

しかし千田洋幸が、戦争と、戦争による死の意味を追求する戦争児童文学は、死から「生」をとらえなおす視点を提示し、読者自身に自己解体への契機をもたらすという点においては、もっとも可能性にみちたジャンルなのである<sup>⑧</sup>と述べて、戦争児童文学の可能性を見出しているように、戦争児童文学のアクチュアリティは完

全に失われたわけではない。例えば「自己解体への契機」という点では、国際化を意識して小学校から英語教育の導入が検討される現在、自民族・自文化を相対的に捉える外部の視点を内面化することは日本人にとって重要な要件である。長崎源之助「父ちゃんの凧」（学校図書・小五上）は、中国大陸に侵攻した日本軍を相対化する視線が描きこまれており、自民族中心の価値観を転倒する契機を装置している点で有効性が認められる。日本人としてのアイデンティティを獲得していく時期においてこそ、世界における日本人の功罪を知り、その両方を受け入れておくことが望ましい。そのためには、児童文学や教科書教材の対象が、日本の戦争や日本の児童文学作家の作品に限定される必要はないはずである。

憲法九条を掲げる戦後の日本が、戦争に巻き込まれることのない平和な国家である、という認識は広く国内外に浸透している。しかし、それは正当な認識であろうか。自国だけが戦争の惨禍に見舞われないからと言って、それを果たして平和な五九年と称して良いのであろうか。実際のところ戦後においても現在においても、日本は戦争と全く無関係というのではなかった。一九五〇年の朝鮮戦争では、日本は米軍の輸送・補給基地であり、それはヴェトナム戦争でも同様だった。多国籍軍のために一三〇億の戦費を負担した湾岸戦争を経て、イラク戦争においては積極的に米英軍を支持して、今ま

での軍事補給基地としての役割から大きく転じて米英軍の物資を輸送する後方支援部隊としての役割を担うようにさえなり、現在は「人道復興支援」の名の下に自衛隊をイラクのサマワに派遣して「復興事業」に携わらせ多国籍軍と協働しているのである。「国際貢献」とは言いながら、日本はいつの間にか戦争とは無関係ではなくなっている。

戦争は、今でも行われている。われわれは、それら戦争の犠牲者や難民、さらには兵士の中にさえ子どもたちの姿を見出すことができる。日本の外側に目を向けることで、戦争と子どもをめぐる問題は数限りなく視野に入ってくるのである。戦争や原爆を過去における国民的悲劇としてだけ位置づけるのではなく、今なお人類が直面する深刻な課題という観点から捉えなおすことが、現在を生きる子どもたちに平和や命の尊さに気づかせるばかりでなく、自民族ばかりでなく他民族を尊重する意識を育てることにつながり、それはまた戦争児童文学を新たな途へ導くことになるだろう。

## 注

- ① 長谷川潮「現代児童文学、その生成と発展―60年代から70年代へ―」日本児童文学者協会編『戦後児童文学の50年』一九九六年八月、文溪堂、四七頁、四八頁。
- ② 『広島県史』（現代 通史Ⅶ）一九八三年三月二五日、広島県、三九七

頁。なお条約の発効は、一九五二年四月二八日。

- ③ 渋谷清規「児童文学と原爆」「解釈と鑑賞」第五〇巻第九号、一九八五年八月一日。

- ④ 関口安義「一つの花 評伝今西祐行」二〇〇四年三月二二日、教育出版、一三八頁、一三九頁。

- ⑤ 住田 勝「断絶から対話を拓く戦争児童文学の可能性―『ヒロシマのうた』を手がかりとして―」『文学の力×教材の力』（小学校編六年）、二〇〇一年三月一六日、教育出版、一八二頁。

- ⑥ 川口隆行「原爆文学」という問題領域（『プロブレマティーク』―夏の花「黒い雨」の正典化、あるいは「原爆文学史」―）『プロブレマティーク』2、二〇〇一年七月。

- ⑦ 今西祐行「あとがき」『今西祐行全集』第六卷、一九八八年一〇月、偕成社、二八二頁。

- ⑧ 注4に同じ、一四八頁。

- ⑨ 注7に同じ、二八二頁。

- ⑩ 注7に同じ、二八二頁。

- ⑪ 萬屋秀雄「解説・今西戦争児童文学について」『今西祐行全集』第六卷、一九八八年一〇月、偕成社、二八七頁、二八八頁。

- ⑫ 注7に同じ、二八四頁。

- ⑬ 他に原爆を扱った作品として、いぬいとみこ「川とノリオ」（昭和五五年度版日本書籍・教育出版六年生）、沖井千代子「すいかの種」（昭和五八年版学校図書・四年生）が、それぞれ教科書に採録されている。

- ⑭ 注6に同じ。

- ⑮ 住田勝「読者の読みのリアリティーの形成の問題―『ヒロシマのうた』の作品論を読んで―」『文学の力×教材の力』（小学校編六年）、二〇〇一年三月一六日、教育出版、一九八頁。

⑯ 内田友子「『不謹慎』のゆくえ——『体験』をめぐって」『原爆文学研究』1、二〇〇二年八月一日。

⑰ 宮川健郎「戦争児童文学という『愛』——あるいは『戦争児童文学』廃止のためのノート」『日本児童文学』第三八卷第三号、一九九二年三月一日。

⑱ 千田洋幸「国語教科書のイデオロギー・その2——『平和教材』と『物語』の規範——」『東京学芸大学紀要』（第二部門 人文科学 第四七集、一九九六年二月二十九日）。

〔付記〕

「ヒロシマの歌」「あるハンノキの話」の本文引用は、『今西祐行全集』第六卷（一九八八年一〇月、偕成社）に、「敗戦まで」の引用は『今西祐行全集』第一五卷（一九八九年一〇月、偕成社）に拠る。